

その他

五円の送金

長崎県 元島 和男

昭和十九年一月十日、私は新京の満州第二六七八部隊第一大隊第三中隊に入隊いたしました。

入隊前は、大連通信局西広場郵便局に勤務致しておりましたが、現役兵として入隊通知が参りますと、郵便局長さん始め上司の方々が、郵便局に籍を残して入隊しなさいよ、給料は少なくなるが、実家に送金もできるし、復職もできるから退職するなと、みんなで奨めて下さいました。

戦局はますます苛烈さを加え、新聞、ニュースの報道をみるにつけ、次々と若者が尊い命を捧げ、祖国の防衛に努力している時、復職を考えて籍を郵便局に残す気持

にはなれず、ご親切な言葉に感謝しながらも、「局長さんやみなさん、ご厚意は有難くお受けしますが、それではこの身を御国に捧げるのに、未練が残ります、家族には毎月五〇円の送金ができなくなりますので、早速困ることは目に見えてわかりますが、きつと許してくれると思います。未練残さず、潔く御国のためにこの身命を捧げさせてください」と辞表を出して入隊しました。

月給五〇円に外地手当合わせて九五円、その中より毎月五〇円を送金し、女手一つで五人の弟妹を養っている母親に、生活の足しにと送金しておりましただけに、送金が途絶えることは大変な苦勞をかけることになりましたが、「御国のために辛抱して下さい。苦しいのは私たちだけではありません、働き手を失った家族の苦しさは、全国に数かぎりなくあると思います。何卒お許し下さい」と、お詫びのハガキを出し、二等兵の給料八円五〇銭の中から、毎月五円を故郷の母に送金致しました。

毎日毎日目から火の出るように叩かれ、蹴られて、まるで生地獄、格子なき牢獄の中にあっても、思いを故郷に馳せ、苦勞している母親や、弟や妹たちの姿を思い浮かべ、齒を食いしばり辛抱しながら、毎月の五円を送金しました。

一期の検閲前に、大隊副官殿より呼び出しを受けました。私の預金通帳を見ながら、八円五〇銭の中から毎月五円送金しているが、深い理由があるのかと尋ねられましたので、母親一人で五人の弟妹を養育していること、郵便局を退職した時の決意を申し述べますと、大隊副官殿は立ち上がって「えらいぞ、有難う、がんばれよ」と、しっかりと手を握られました。

一等兵に進級し、八円、上等兵に進級し一〇円、送金を続けましたが、その度に、金釘流の拙い字で受け取ったのハガキを押し頂き、お母さん許して下さいとお詫びの涙を流しました。昭和二十年六月十三日より四回、鞍山製銅所を空襲するB 24の爆撃を受けました。

二十年九月十六日奉天を後にし、シベリアのカラカンドに十一月三日到着。零下二五度の寒い生活が始まりま

した。建設現場の穴掘り作業で、吹きさらしの野原にぶるぶる震えながら、凍ついた大地に鉄棒を叩きつけ穴掘りを致しました。祖国日本はどうなっているのでしょうか・・・送金ができない今、家のものはどんな生活をしているのだろうか・・・胸の裂ける思いの毎日でありました。

昼間の作業が終ると、タバコの包み紙を伸ばし、それに小説を書いてくれたものを持って、一五〇〇人収容している捕虜収容所の一棟一棟を回り、小説を読みながら、みんなが助け合って、元気で日本へ帰ろうと訴えつづけました。

二十二年七月十七日、カラカンド地区の第一回目の帰国、一五〇人の重病人を引率して帰国することになりましたが、みんなの協力により私どもの収容所では、この間の死亡者は僅か二人でした。

それにつけても忘れえないソ連人二人。一人は現場監督のサマトフじいさん、日本人に余りにも親切にしてくれるので、その理由を質しますと、「かつて私は日露戦争の時、日本軍の捕虜となり、四国の善通寺収容所に収

容されたが、その時の日本人の親切さは生涯忘れ得ない。今は立場が変わったが、そのご恩返しをするときだと、私なりに努力している」と、優しい微笑を浮かべ親切にしてくれたサマトフじいさん。

もう一人は、帰国列車の輸送指揮官、各收容所からの寄り集まりの日本兵、その行儀の悪さに見かねて、各車両の世話役を集め、「皆さんにお願いしたい、私はこの度スターリンから、皆さんの帰国列車の輸送指揮官を仰せつかった時、無上の光栄に思いました。私は幼いときから両親に、世界一優秀な民族は日本民族であると教えられた。士官学校でも教官から、世界を制覇出来るものは日本民族であると教育を受けた、その優秀な日本民族の中で、最も優れた関東軍の精鋭を輸送する指揮官を拜命し、そのすばらしさを学ぼうと喜んだのに、何たるあわれな姿でしょう。私はこのような姿を見るために、輸送指揮官を引き受けたではありません。父と母が教えてくれた世界一優秀な民族、日本民族の素晴らしさを見せて下さい。日本にいる父と母はその姿を待っているでしょう。お願いします。」と、片言まじりの日本語で、

涙を流して忠告してくれた三十五歳のゲベウの中尉の姿を忘れることはできません。

二十二年七月二十五日舞鶴に上陸、二十七日我が家に帰り着きましたが、残念ながらこの郵便局にも復職できませんでした。郵便局に籍を残して入隊した仲間たちは、退職後も国の恩恵を受けて悠々たる生活です。

戦争はまさに悲劇であります。人間の幸福を奪い、生地獄に送り、家庭を貧困のどん底に叩き落とし、人間の根性まで腐敗させます。国境を越え美しい人類愛とともに、五円の送金にこめた母子のきずな、戦争の悲劇は、家訓として子々孫々に至るまで残します。

北千島の占守島に戦う

山口県 松 永 幸 助

民間、軍隊を通じて四年間お世話になった満州を去り、釜山を経由して博多に着いた。吉塚駅から汽車に乗り小郡駅に停車したので、鎧戸を押し上げて懐かしいプラッ